

骸骨の黒穂

夢野久作

青空文庫

まだ警察の仕事の大ザツパな、明治二十年頃のこと……。

人気にんぎの荒い炭坑都市、筑前ちくぜん、直方のうがたの警察署内で起った奇妙な殺人事件の話……。

煤煙に蔽われた直方の南の町外れに、一軒の居酒屋が在った。周囲は毎年、遠賀川おんがの浸水区域になる田圃たんぼと、野菜畑の中を、南の方飯塚に通ずる低い堤防じみた街道の傍にポツンと立つた藁葺小舎わらぶきこやで、型の如く汚れた縄暖簾なわのれん、軒先の杉葉玉と「一パイ」と染抜いた浅黄木綿もめんの小旗が、町を出外れると直ぐすに、遠くから見えた。

中に這入はいると居間兼台所と土間ふたまたと二室しかない。その暗い三坪ばかりの土間に垢光りする木机と腰掛が並んで右側には酒樽桝棚、左の壁の上に釣った棚に煮肴にぎかな、蒲鉾かまぼこ、するめ、うで蛸だこの類が並んで、上り框あがかまちに型ばかりの帳場格子がある。その横の真黒く煤すすけた柱へ「掛売かけうり一切御断おことわり」と書いた半切はんぎりが貼はりて在るが、煤けていて眼に付かない。主人は藤六とうろくといつた六十がらみの独身者の老爺おやじで、相当無頼なぐれたらしい。黥いれずみを背負おつていた。色白のデツプリと肥はつた禿頭はげあたまで、この辺の人間の扱い方を知つていたのである。

う。坑夫、行商人、界限の百姓などが飲みに来るので、一パイ屋の藤六藤六といつて人気
がよかつた。巡查が茶を飲み立寄つたりすると、取つときの上酒をソツと茶碗に注いだ
り、顔の通つた人事係が通ると、追いかけて呼び込んで、手造りの濁酒の味見をしてみら
つたりした。

この藤六老爺には妙な道楽が一つあつた。それは乞食を可愛がる事で、どんなにお客の
多い時分でも、表口に突立つて這入らない人間が在ると、藤六は眼敏く見付けて、眼に立
たないように何かしら懐中から出してやつて立去らせるのであつた。立去るうしろ姿を
見ると老人、女、子供は勿論のこと血氣盛んな……今で云うルンペン風の男も交つていた。

お客の居ない時などは、母子連れおやこの巡礼か何かあがりぐちに、何度も何度も御詠歌を唱わせて、
上あがりぐち口に腰をかけたまま聞き惚れているような事がよくあつた。そのうちにダンダン感
動して来ると、藤六の血色のいい顔が蒼白く萎びて、眉間に深い皺しわが刻み出されて、やが
てガツクリと頸うなだ低れると、涙らしいものをソツと拭いているような事もあつた。そんな場
合には巡礼に一升ぐらいの米と、白く光るお金を渡しているのが人々の眼に付いた。

麦の穂が出る頃になると藤六は、やはり店に人の来ない時分を見計らつて、家の周囲の
麦畑へ出て、熱心に麦の黒穂くろんぼを摘んでいる事があつた。これも藤六老爺おやじの一つの癖とい

えば云えたかも知れないが、しかし近所の人々は、そうは思わなかった。やはりほとけしやう仏性ひまの藤六が、閑暇ひまさえあればソナ善根をしているものと思つて誰も怪しむ者なんか居なかつた。

ともかくにもこの藤六おやじ老爺が居るお蔭で、直方には乞食が絶えないという評判であつたが、実際、色々な乞食が入代り立代り一パイ屋の門口に立つた。「あの乞食酒屋で一パイ」とか「乞食藤六の酒は量りが良ええ」とか云われる位であつた。

その名物老爺おやじの藤六が昨年……明治十九年の暮の十一日にポツクリと死んだ。

炭たしん団を埋めた小火鉢の蔭に、昨夜喰つたものを吐き散らして、夜具の襟を掴んだまま、敷布団から乗出して冷めたくなつてゐるのが、老爺おやじの心安い巡回の巡査に発見されたので、色々色々と死因が調べられたが別に怪しい点は一つも無かつた。

ただ一つ、盗まれたものはないかと家うちじゆう中を調べてゐるうちに、押入の隅に祭つてある仏壇らしいものに線香も何も上げてない。その代りに白紙に包んだ麦くろんぼの黒穂くろんぼの、枯れたのが、幾束も幾束も上げてあるのが皆を不思議がらせた。それからその仏壇の奥の赤い金欄きんらんの帷帳とばりを引き開いてみると、茶褐色に古ぼけた人間の頭蓋骨ひどつが一個出て来たので皆

……ワア……と云つて後あと退りした。しかし、それとても別段に藤六の死因とは関係がありそうに思えなかった。つまるところ、藤六の風変りな信仰であつたらう。それとも藤六がどこかで発見した無縁仏の骸骨を例のほとけ性で祭つてやっていたものかも知れない。黒穂くろんぼの束も、何の意味もなしに、持つて来ただけ始末して仏様に供養していたのかも知れない……といったような話のほかに説明の付けようがなかったので、結局、藤六の死因は何かの中毒だろうという事になつて片付いた。

なおその騒ぎの最中に、帳場の掛かけ碇すずりの曳出ひきだしからボロボロになつて出て来た藤六の戸籍謄本によつて、藤六が元来四国の生れという事……それにつれて、藤六は、その近まわりに一人も身よりタヨリの無い男という事がわかつたので、葬式は自然近所葬ともらいといつた形になつた。すると又それを聞いた直のうがた方の顔役が十円札を一枚投出してくれたので、それを便りに赤の他人が十人ばかり寄合つて、今夜は通夜をしようという事になつたが、もちろん念仏なんかはホンの型ばかり。仏が売り残した煮物類と酒樽の酒を相手に、いい加減酒の座が騒がしくなつた日暮れ方のこと、真黒に日に焼けた行商人体ていの若い男が、ノツソリと店先へ這入つて来て案内を乞うた。

その態度が乞食でもなく、酒買いででもないらしいので、上り口に居た若い男が取合つて

みると、それは仏の甥おいと名乗る男で、叔父の藤六が死んだばかりと聞くと、上り框しに獅嚙がみ付いて、手も力もなくグシグシと泣出したお蔭で、一座がシンとしてしまった。皆、どう処置していいか、わからなくなつたのであつた。

そのうちに誰かが気を利かして警察へ知らせたらしく、暫く経つと巡査が一人来て取調べる事になつた。……その様子を聞いてみると、その男の名前は銀次といつて今年三十二歳であつた。元來四国の者で、仏様……藤六の兄の藤十郎から十七の年に、勘当された放蕩者の一人息子で、中国筋を流れ流れて大阪へ着いた二十五の年に、初めて放蕩の夢から醒めたという。それから人足、手伝い、仲仕の類を稼いで、あらん限りの苦勞をした揚句あげく、かん鉋な 餡あめ 売りの商売を覚えて、あし足だ か高だ か盃だいをか荷つぎ荷つぎ故郷へ歸つて来たが、歸つて来てみると故郷は皆死絶えたり零落してしまつたりしてアトカタもない。初めて今までの親不孝が身に沁みてわかつた銀次は、そこでタツタ一人の叔父の藤六が、九州の直方で酒屋をやつていふという話を風のタヨりに聞いたので、そのまま門司まで便船で来て、やつとここまで辿たどり付いたところで御座います……と云つて又泣いた。

そんな話は皆、藤六の戸籍謄本とピツタリ一致した。殊に日に焼けてこそおれ若い銀次の人相から骨組が、見れば見る程死んだ藤六に似ている事がわかつたので、巡査は勿論、

通夜の連中もモウ銀次を疑わなかった。それどころでなく、これも私の引合わせとか何とかいうのでスツカリ感激した一同は、直ぐに銀次を引っぱり上げて施主の席に座らせた。銀次が私の顔を見て又もサメザメと泣いている間に、皆ヒソヒソと耳打ちし合つて、いくらかのお鳥ちよもく 目を出し合つて包んだりした。

それから間もなく、銀次が程近い町の顔役の所へ、お礼の挨拶に行つて帰つて来ると、通夜の席が又賑やかになつた。銀次は明日あすから私がこの店を引継ぐように親分さんへも御挨拶して来ました。どうぞよろしく……というので巡查を上席に据えて盛んに酒を出した。そうして翌る朝になると銀次は、酔い倒れた連中を背負つてソレゾレの家うちへ届けたり、人足を雇つて仏を焼場へ持つて行つたり、なかなかコマメに立働らき初めた。それに連れて「やっぱり親身の者もんでないとなあ」とか「仏も仕合わせたい」とか近廻りの者が噂し初めた。

2

不思議な事に、その頃から直のうがた方附近に、眼に立つて乞食が殖ふえて来た。それがアンマ

り殖え過ぎて町の迷惑になる事が夥しいので、警察でも捨ておきかねて逐い散らし逐い散らししたものであったが、さながらに飯の上の蠅で追っても追っても集まって来た。一方に炭坑が景気付くに連れて殺人殺傷事件がグングン殖えて来たりしたので、警察ではスツカリ持て余してしまつたが、しかしその乞食連中の中で町外れの藤六酒屋の軒先に立つ者が滅多に居なくなつた事には誰も気が付かなかつた。藤六と違つて銀次は又、特別の乞食嫌いらしく、いつも邪慳に追払つていたので、そのせいだろう位に皆考えていた。

銀次はそれから後、^{のち}商売にばかり身を入れて一步も家を出ないせいか、見る見る色が白くなつて、役者のようないい男になつて来た。自分では三十二と云つていたが、二十七八ぐらいにしか見えなかつた。切れ上つた^{めじり}皆と高い鼻筋が時代めいて、どことなく苦味の利いた細長い顔が、暗い店の中からニツコリして出て来ると、男でもオヤと思う位だったので、大袈裟な意味でなしに直方中の女という女の評判になつて来たものであったが、それでも銀次は固い人間と見えて、遊びに行くフリも見せなかつた。どこまでもお客様大切、仏様大切といった恰好で、朝から晩まで暗い店の中で、物腰柔らかく立働らいたので、その翌る年の春頃になると、今までの店が狭くなるほど繁昌して来た。煮着や何かも藤六と同じように朝早く自分で仕入れて来て、自分で料理するのであったが、それが仲々器用で

美味いという評判であった。

ところがその春頃になると又不思議な事に、あれ程執念深く直方に集中していた乞食連中がいつの間、どこへ消えたのか殆んど一人も居なくなっていた。程近い英彦山ひこさん参りや、新四国参りの巡礼以外には探しても見当らなくなってしまった。人々はこうした現象を乞食の赤潮あかしおと云って驚いていたし、警察側でも頻りに首をひねっていたが、しかし、こうした奇現象の原因は容易に考えられなかった。

新暦の桃の節句の晩であった。

いい月夜であったが店が割合に閑散で、珍らしく客が早く引けたので、銀次はチョット表に出て前後の往来を、月の光りで遠くまで見渡してみた。それからイツモの通りに慌しく表の板戸を卸して小潜こくぐりの掛金をシツカリと掛け、裏の雨戸を閉めて心張棒しんはりぼうを二本入れた。藤六の位牌いはいの前に床を展べて煤すすけたランプを吹き消そうとすると、トタンに表の戸をトントンとたたたく女の声が出た。

「すみません。あけて下さい」

銀次はチョットの間、その音を睨み付けて脅えたような顔をした。ランプの下で屹きつと身

構えをしていたが、微かにチョツと舌打ちをすると寝間着の古浴衣のまま面倒臭そうに上り框を降りた。

イザといえは直ぐにも飛掛りそんな身構えで、低い、狭い潜戸くぐりどを開けてやると、女は直ぐに這入つて来た。

十九か二十歳はたちぐらいの見るからに初々ういういしい銀杏いちようまげ髻の小柄な女であつた。所謂いわゆる丸ボチヤの愛嬌顔で、派手な紺飛白こんがすりあわせの袷あわせに、花模様の赤前まえだれ垂、素足に赤い鼻緒の剥はげチヨケぬりげたた塗下駄ぬりげたを穿いていた。

銀次は張合いが抜けたように、その姿を見上げ見下した。

小女こおんなは美男の銀次に見られて真赤になつてしまった。背後に隠していた一升徳利と十円札を銀次の鼻の先に差出しながら、消え入るように云つた。

「お酒を一升。一番ええとこを……」

銀次が無言のまま頭を下げてお金と徳利を受取ると、小女はよろめくように潜戸の端に凭よりかかつて頸低うなだれた。

銀次は新しい酒樽からタツプり一升引いて小女に渡した。それからラムプをグツと大きくして、押入の端の小篋筒ひきだの曳出ひきだしから黄木綿きもめんの財布を引っぱり出して、十円のお釣つり銭を

出してやった。

「姉さん、どこから来なされたとな」

と顔をさし寄せて訊いてみたが、小女はチラリと上目づかいに銀次の顔を見たきり、首の処まで真赤になつてしまった。無言のまま逃げるように潜戸の外へ^{すべ}入り出てしまった。

あとをピツタリと閉めて、掛金をガツチリと掛けた銀次は、そのまま町の方へ去る小女の足音が聞こえなくなるまで聞き送っていた。ニンガリと笑い笑いつぶやいた。

「……へへ……とうとう来やがった。可愛相だが悪魔^{デベル}様の犠牲だ。へへ。待っていたぞ畜生……うまく行けあ俺の信心は満点だ。大阪の金持以上の根性になれる。へへ……義理も人情も、神も仏も踏殺して行けるんだ。怖いものなしになれるんだ。へへ。立身出世自由自在だ。へへ。待っていたぞ畜生……」

そんな^{ひとりごと}独言を云っているうちにタツタ一人で真青に昂奮したらしい銀次は、緊張した態度でセカセカと身支度を初めた。

最初に^{ここ}此家へ来た時の通りの手甲^{てこうぎ}脚絆^{やはん}に身を固めて、角帯をキリリと締め直すと、押入の前にキチンと坐った。藤六が居た時のままになっている粗末な仏壇の前に坐つて、赤い^{きんらん}金欄^{とほり}の帷帳の中から覗いている茶褐色の頭蓋骨を仰ぎながら、何かしら訳のわからぬ

事をブツブツと唱え初めた。それから自分の頭の毛を両手でゴシゴシと掻きまわして礼拝し、礼拝しては掻きまわして四度ばかり繰り返すうちに、やがて猿のような卑しい冷笑を、顔一面に浮べながらスツクリと立上ると、押入の反対側の隅の小箆笥から、もう一度、黄木綿の袋を引出して、かなりの額の円札や銀銅貨を叮嚀に数えて胴巻に入れた。同じ曳出の中に在った鋭いらしい首も中身を検めてから懐中へ呑んだ。やはり押入の向側から鮑飴売りの足高盥取出しかけたが又、押入の中へ投込んだ。

それから銀次は上り口に飯櫃を抱え出して、残りの飯と、店に残った皿のもので、湯漬飯を腹一パイガツガツと掻き込むと、仏が生前に帳場で使っていた木綿縞の古座布団を一つ入口の潜戸の前に投出した。ラムプを吹消して、手探りで草鞋を穿いて、地面へじかに置いた座布団の上にドツカリと坐つて、潜り戸に凭りかかりながら腕を組んで眼を閉じた。

月の光りを夜明けと間違えたのであろう。どこか遠くで鶏の羽ばたきと、時を告げる声が聞こえた。

それから一時間ばかり経つたと思ふ頃、潜戸の外で微かに人の気はいがした。

シンシンシンシンシンという軽い、小さい鋸のこぎりの音が忍びやかに聞こえて、銀次の襟首へ

煙のように細かい鋸のこぎり屑くずが流れ込んだ。最前の小女こおんなが凭りかかっていた処へ横一寸、

縦二寸ばかりの四角い穴がポツクリと切開かれた。そこから西に傾いた月の光りが白々とさし込んだ。

銀次は潜り戸からすこし離れて坐つたまま一心にその様子を見ていた。

やがてその穴から白い小さい手が横になつてスウツと這入つて来た……と思うと何かに驚いたようにツルリと引込んだ。

銀次は動かなかった。なおも息を殺して四角い月の光りを凝視していた。

今一度小さな手がスウツと這入つて来て、掛金かけがねの位置を軽く撫でたと思うと又、スルリと引込んだ。

銀次は依然として動かなかった。

三度目に白い小さい手がユツクリと這入つて来て、掛金にシツカリと指をかけた時、銀次は坐つたまま両手を近づけてその手をガツシリと掴んだ。掴んだままソロソロと立上つ

て手の這入って来た穴に口を寄せた。低い力の籠もった声でユツクリと囁いた。

「……オイ……貴様は巡礼のお花じやろ。……もうこうなったら諦らめろよ」

「……………」

「俺の顔を見知って来たか……」

「……………」

「俺がドレ位の恐ろしい人間かわかったか」

「……………」

「わかったか……阿魔……」

「……………」

「……俺の云う事を聞くか……」

「……………」

「聞かねばこのまま突出すがええか……警察は俺の心安い人ばかりだ」

白い手の力がグツタリと抜けたようであった。

銀次は片手で女の手首をシツカリと握り締めたまま油断のない腰構えで掛金を外した。

黒覆面に黒脚絆、襷掛^{たすきが}の女の身体^{からだ}を潜戸と一^{いっしょ}所に店の中へ引張り込んだ。同時に水

のように流れ込んで来る月明りに透かして女の全身を撫でまわすと、内懐うちぶとこから竹細工用の鋭い刃先の長い、握りの深い切出小刀きりだしを一挺探り出して、渋紙の鞆さやと一所に、土間の隅へカ拉里と投込んだ。ホツとしたらしく微笑して女の覆面を見下した。

「……俺の名前を知つて来たんか」

覆面が頭を強く振つた。シクシクと泣出して、

「……すみまシエン。草鞋わらしせん銭に詰まつて……」

と云ううちに覆面を除くと、最前の小女の青褪めた顔を現わしながら銀次の胸にバツタリと継すがり付いた。シャクリ上げシャクリ上げ云つた。

「……貴方あんたを見損なつて……」

銀次は月明りを透かして外を覗きながら何かしら冷やかに笑つた。今一度、猿のように白い歯を剥き出した醜い表情をしたと思うと、片手で潜戸を締めて掛金をガツキリと掛けた。落ちていた四角い木片きぎれで潜戸の穴を塞ふさいだ。

それから一時間ばかりの間、家の中には何の物音もしなかつた。そのうちに二十分間ばかりラムプがアカアカと灯ついていたようであつたが、それもやがて消えてシインとしてしまった。

月がグングンと西へ傾いた。

方々で鶏にわとりが啼いて夜が明けて来た。

突然、家の中からケタタマシイ叫び声があった。魂消たまげるような女の声で、

「……………何すんのかア——イ……………」

「……………」

「アレツ……………堪忍してエ——ツ」

「……………」

「……………嘘吐うそつき嘘吐うそつき。ええこの嘘吐うそつき……………エエツ。口惜くせしい口惜くせしい口惜くせしい口惜くせしい……………」

という叫び声と一所にドタンボタンという組打ちの音が高まったが、それがピッタリと静まると、やがて表の板戸が一枚ガタガタと開いて、頬冠ほのかぶりをした銀次の姿が出て来た。銀次の背中には、細引でグルグル巻にして、黒い覆面で猿さる轡ぐつわをはめた小女を担かついでいたが、そのまま月の沈んだ薄あかりの道をスタスタと町の方へ急いだ。

女は銀次の背中でグツタリとなっていた。

直方署の巡査部長室の床の上に、猿轡を外された小女が、グルグル巻のまま寝かされていた。銀杏鬘いちようまげがグシャグシャになって、横頬を無残に擦剥すりむいていたが、ジツと唇を噛んで、眼を閉じて、横を向いていた。

その周囲を五六人の警官が物々しく取巻いて、銀次の陳述に耳を傾けていた。

中央に立った銀次は、すこし得意そうに汗を拭き拭きお辞儀をしては、横の火鉢に掛かっている薬罐やかんの白湯さゆを飲んだ。

「……へエ……お褒ほめに預るほどの手柄でも御座んせんで……へへ。あんな離れた一軒家で、前の藤六から以このかた来、小金こがねの溜こぼまっているような噂うわさが立っているそうで御座いますから、いつも油断ゆだんしませずに、出入りのお客の態度たいどに眼を付けておりましたお蔭かげで御座います。へエ。……この小女あまつちよが這入こって来た時に、この界限きげんの者でない事は一眼でわかります。第一これ位の縹きりよう織おりの娘は直方には居りませんように……へへ。それから一升しやう買かいに十円札じゅうえんがを突つき出す柄がらじや御座んせんで……どう考えましても……へエ。それで一

層氣を付けておりますとこの小女あまつちよぬめえ、潜り戸もたに凭れかかる振りをしてマン中の棧から掛金までの寸法を二本指で計つてケツカルので……へエ。それから私が十円札の釣銭つりを出すところを、うつむいたまま氣を付けている模様ですから、私はイヨイヨ今夜来るなと思ひました。来たら出来るだけ身輕にしとかと不可いかんと思ひまして、慣れた者の飴売りの身支度をして待つておりますと……へエ。ツイ一時間ばかり前の事で御座います。掛金の上の処を切抜きました小女あまつちよが手を入れましたけに、直ぐに引つ掴まえて引つくり上げて、ここまで担いで参りましたので……へエ」

「成る程のう。貴様は氣が利いとるのう。素人には惜しい度胸じゃ。アハハハ……」

「フーム、コンナ常習犯の奴の手口は、アイソ、サグリ、ノリと云うて、三度手を入れてみるものじゃがのう。最初に手を入れた時に捕えようとしても決して捕えられるものじゃないがのう」

これは銀次と肩を並べている瘦せ枯れた胡麻塩鬚ごましおひげの巡査部長の質問であつた。しかし銀次は平氣で答えた。

「へエ。そげな事は一向存じまつせんでしたが、ただこの外道げどうと思うて待ち構えておりますところへ、遣つて参りましたので思ひ切り引つ掴んでしまいました……へへへ……」

「オイオイ……女……それに相違ないか」

巡査部長が靴の先で小女こおんなの頭をコツコツと蹴った。

小女はヤット眼を見開いて、冷やかに頭の上を見た。噛んでいた唇を静かに嘗なめまわすとハツキリした声で云った。

「……この縄……解ほどいてくんさい。白状するけに……」

「……ナニ……縄を解け……?……」

「……アイ……」

「そのまま云うてみい」

「イヤイヤ、このままならイヤぞい。痛うて物が云われんけに……どうぞ……」

小女は又もシツカリと眼を閉じて唇を噛んだ。訊問に慣れているらしい巡査部長は、凹くぼんだ眼でマジリマジリと小女の顔色を見ていたが、やがて大きく一つうなずいた。傍の巡査を腮あごでシャクツた。

「オイ。解いてやれ」

「ハツ」

若い巡査が二人で女を抱え起して泥だらけの板張の上に横座りさせた。

これを見た銀次はチョット狼狽したらしかつた。巡查達の顔を素早くツラリと見渡したまま固くなっていたが、やがて覚悟をきめたらしく、軽いため息を一つ鼻から洩らすと、縄を解く邪魔にならないように、すこし横に立退いた。入口に立っている巡查の背後をすり抜けて一気に表へ飛出せる位置に立った。古ぼけた博多の角帯の下に、右手の拇指を突込んで直ぐに結び目を前へ廻わせる準備をしていたのを誰も気付かなかつた。

キッチンと座り直した小娘はそうした銀次の態度をジロジロと横目で見ているようであつた。巡查に取捲かれたまま縄を解かれると、すぐに襷を外して、肩のあたりをシキリに揉んでいた。それから裾をつくろいながら中腰に立上つて、膝を揉んだり押えたりした。そうして又もペツタリと座り込むと鬢のホツレを指先で搔上げながら咳払いを一つ二つした。「……すみません。お湯一パイくんさい。咽喉がかわいて叶わぬけに……」

と頭を下げて、カンカン起つた火鉢の上の大薬罐に手をかけると、思い切つて立上りさま天井を眼がけて投上げた。灰神楽がドツと渦巻き起つて部屋中が真白になつた。思わず飛退いた巡查たちが、気が付いた次の瞬間にはモウ銀次と小女の姿が部長室から消え失せていた。

部長室から飛出した銀次は、広間の事務室の卓子テーブルの上に飛上った。手に触れた硯すずりば箱こを追い縋すがつて来る小女めがけてタタキ付けると、書類を蹴散らしながら机の上を一足飛びに玄関へ出た。その腰に獅噛しがみ付いた小女は、いつの間に奪い取ったものか銀次のヒあ首いくちを、うしろ抱きにした銀次の肋骨あはらの下へ深く刺し込んだまま、ズルズルと引擦られて行つた。

「父サンの仇讐かたき……丹波小僧……思い知つたか……丹波小僧……」

と叫び続けていた。そうして銀次と絡からみ合つたまま玄関の石段を真逆まっさかさま様に転がり落ちると、小女は独りでムツクリと起き上つて、頭から引かむつ冠せられた銀次の着物と帯をはね除のけた。倒れた椅子を避け避け追いかけて来る警官を振り返つて、擦り剥けた顔でニッコリと笑つた。

それから血に染まつたヒ首と両手を、向家むかいのペンペン草を生やした屋根の上の青空の方
向に高く挙げて力一パイ叫んだ。悲痛な甲高い声で、

「……皆の衆……皆の衆すみません。私はお花じゃが……もう私は帰られんけに……帰

られんけに……」

と云ううちに、銀次の身体からだに腰をかけたまま、血染のヒ首を両袖で捲いて、白い自分の首筋にズツプリと突込んだ。そのまま涙をハラハラと流して、唇からプルプルと血を吐き吐きグツタリとなった。銀次と折重なって倒れようとしたところを走りかかって来た巡査たちに抱き止められた。

「馬鹿ツ……」

「何をスツか……」

「馬鹿ツ……」

という巡査たちの怒号のうちに、太い血の筋を引いた二つの死骸が、事務室の中へ引っぱり込まれた。

警察の門前から、玄関先まで間もなく人の黒山になったが、やがて走り出て来た巡査が、群集を追払って、表門と玄関をピツタリと閉め切ってしまった。

その中うちに玄関の石段と敷石に流れた夥しい血が、小使の手で洗い流されてしまうと皆立去ってしまったが、それでも、

「何じゃったるか」

「何じやつたる何じやつたる」

と口々に云い交わしながら、近所の人々は皆、表に立っていた。

「須崎監獄へ行って取調べてみますと、どうも意外な事ばかりで驚きました」

出張から帰って来たらしい胡麻塩鬚の巡查部長が、大兵肥満の署長の前に、直立不動の姿勢を執つて報告をしていた。事件後、四五日目の正午頃の事であった。

「第一、先般、御承知の一パイ屋の藤六老爺が死にました時に仏壇の中から古い人間の頭蓋骨と、麦の黒穂が出た事は、御記憶で御座いませう」

署長はこの辺の炭坑主が寄附した巨大な、革張りの安楽椅子の中から鷹揚にうなずいて見せた。

「ウムウム。知つとるどころではない。それについてこの小学校の校長が……知つとるじやろう……あの総髪に天神髯の……」

「存じております。旧藩時代からの蘭学者の家柄とか申しておりますが」

「ウムウム、中々の物識りという話じやが、あの男がこの間、避病院の落成式の時にこげな事を話しよつた。……人間の舍利甲兵衛に麦の黒穂を上げて祭るのは悪魔を信心しと

る証拠で、ずうと昔から耶蘇教やそに反対するユダヤ人の中に行われている一つの宗教じゃげな。ユダヤ人ちうのは日本の××のような奴どもで、舍利甲兵衛くろんぼに黒穂くろんぼを上げておきさえすれば、如何どげな前科があつても曝ばれる氣遣きぢいは無いという……つまり一種の禁厭まじないじゃのう。その上に金が思う通りに溜たまつて一生安樂あんらくに暮くされるところという一種の邪宗門じやしゆもんで、切きりし支丹たんが日本にに這入まつて来るのと同じ頃に伝わつて来て、九州地方きゆうしゅうの山窩さんかとか、××とか、
 いうものの中に行いわれておつたという話わじゃ」

「へエツ。それは初耳はつみみで……私が調べて参まりました話わと符合ふごうするところがありますよう
 ……」

「フウム。それは面白いのう。あの藤六とうりくが死しんで、舍利甲兵衛せりけいべいと黒穂くろんぼの話わが評判へいばんになりよつた時分に、ちようど避病院ひきびやういんの落成式らつせうしきがあつたのでう。校長けいしやうの奴やつ、大得意だいとくいで話わしよつたものじゃが、何でもこの直のうがた方地方かたは昔むかしからの山窩さんかの巢窟さうくつじゃつたさうでのう。東あづまの方は小倉こくらの小笠原こがさわら、西にしは筑前ちくぜんの黒田くろたから逐おわられた山窩さんかどもが皆みな、この荒涼あらいやうたる遠賀川えんががわの流域りゆういきを眼まなこざして集あまつて来て、そこここに部落ぶつらくを作つくつておつたものじゃさうな。藤六とうりくはやつぱりその山窩さんかの流れながれを酌しやくむ者ものじゃつたに違ちがわんと校長けいしやうは云いいおつたがのう。吾輩われらは元來もとより、山窩さんかという奴やつを虫むしが好このかんで……悪魔あくまを拝をむだけに犬畜生いぬちゆうじやうとも人間にんげんともわからぬ事ことをしおるで

のう。ことに藤六は、あの通りの人物じやったけに真逆まさかに山窩とは思われぬと思うて、格別気にも止めずにおったのじやがのう」

「へエ。そのお話を今少まじと早よう伺つておりますと面白う御座いましたが……」

「ふうむ。やつぱり藤六はここいらの山窩の一人じやったんか」

「ハイ。山窩には相違御座いませぬが、ここでは御座いませぬ。元来、高知県の豪農の息子じやったそうで御座いますが、若氣の過ちで人を殺しまして以来、アチコチと逃げまわつた揚句あげく、石見いわみの山奥へ這入りまして、関西でも有名な山窩の親分になっておりました者だそうで……」

「フウム。どうしてそこまで探り出した」

「……こんな事が御座います。あの丹波小僧と巡礼お花の死骸を、共同墓地の藤六の墓の前に並べて仮埋葬にしておいたので御座いますが、その埋めました翌る日から、女の死骸を埋めた土盛りの上には色々な花の束が、山のように盛上つて、綺麗な水を張った茶碗などが置いてありますのに、銀次の土盛の上は、人間の踏付けた足跡ばかりで、糞や小便が垂れかけてあります。夜中に乞食どもがした事らしい御座いますが……」

「ふうむ。その気持はイクラカわかるのう。山窩とても人情は同じことじやで……」

「ところがその親の藤六の墓は、ずっと以前から何の花も上がりませぬ代りに、枯れた麦の黒穂くろんぼを上げる者が絶えませぬそうで……どこから持つて来るか、わかりませぬが……」

「成る程のう。その理屈もわかるようじゃ。校長の話を聞いてみるとう」

「私はそのようなお話を存じませぬものですけに、いよいよ不思議に思うておりまするところへ今度の事件で御座います」

「ウムウム」

「この辺の者は麦の黒穂くろんぼの事を外道花げどうばなと申しておりますので、藤六の墓に黒穂くろんぼが上がるのは不思議じゃ。何か悪い事の起る前兆しらせではないか……というこの界限の者の話をチラと聞いたり致しましたので、イヨイヨ奇怪に存じておりますところへ一ヶ月ばかり前の事で御座います。有名な窃盗犯で鍋墨なべずみの雁八という……」

「ウムウム。福岡から追込まれて来て新入坑の坑夫に紛れ込んでおったのを、君が発見して引渡したという、あれじゃろ……」

「ハイ。彼奴あいつが須崎の独房で、毎月十一日に腥物なまぐせを喰いやらんチウ事を、小耳に挟んでおりましたけに……十一日は藤六の命日で御座いますけに……」

「成る程……カンがええのう」

「それがで御座います。何をいうにも二人とも死んでおりますために手がかりが一つも御座いませんで困りました。署員の意見を尋ねてみましても、ただこの事件と例の乞食の赤潮との間に、何か関係がありはせぬかという位の、まことにタヨリない意見で、事件の真相の報告書の書きようが御座いませぬ。そこで、ほかに手蔓らしい手蔓は無いと思いましたが、雲を掴むようなお話では御座いましたが、御留守中独断で福岡へ出張致しまして、只今の鍋墨雁八の口を撈りに参りました訳で御座いましたが、その時に私は思い切つて、お花が死にました時の模様を詳しく雁八に話して聞かせますと、それならばと申しまして雁八が、残らず真相を吐きました。涙をボロボロ流しておつたようで御座いますが……つまり今度、巡礼お花に殺されました丹波小僧と、鍋墨の雁八とは、ズット以前に石見の山奥で、藤六の盃を貰うた兄弟分で御座いましたそうで……しかも雁八が聞いた噂によりますと、丹波小僧というのは藤六の甥どころではない。藤六が天の橋立の酌婦に生まれた実の子らしいという話で……」

「……ううむ。おかしいのう。それでは……何が何やらわからんようになるがのう」

「それがその……それを知つておつたのは藤六だけで、本人は知らんじやった筈と雁八は云うておりましたが……藤六はそんな風にして方々に兎を生み棄てて来た男だそうで……」

「おかしいのう。それでも……」

「もうすこしお話しがあります」

「話してみい」

「……ところが、それから後、藤六はその丹波小僧と雁八を一本立にして手離しましたアト、だんだん年を老とつて仏心が附いたので御座いましょう。今一人居ります娘が、九州で巡礼乞食に化けて、女白浪おんなしらなみを稼いでいるのに会いたさに、自分の縄張を鬼城おにがじょうの親分に譲つて、石見の山の中から出て来て、この直方まで来て、落付いておりましたものらしく、集まつて来た乞食共の中には、藤六の跡を慕うて来た奴どもが相当居つたものらしい御座います。……と申しますのは、つまり藤六が悪魔様に上げている黒穂くろんぼを頂くと、自分の前科が決してバレぬ。一生安楽に暮される守護符おまもりになる……というので……もつとも雁八はその貰うた黒穂くろんぼを白湯さゆで飲んだと申しましたが……ハハハ……」

6

署長は感慨深そうに腕を組んで眼を閉じた。

「成る程のう。それでわかつたわい。ツイこの頃までこの筑豊地方に限って、小泥棒こぬすとが一つも居らんじやつた理由わけがわかつたわい」

「……ハイ……藤六という奴は余程エライ奴じやつたと見えます」

「そうすると丹波小僧の銀次も、藤六のアトを慕うて来た仲間じやな」

「いや、違います。丹波小僧は、藤六の処を出て、鍋墨の雁八とも別れてから後のち、大阪地方専門の家尻やしりき切りになりましたが、或る処で居直つて人を殺したお蔭で、手厳しく追いかくられましたので、チョット商売にオジ氣が付きましたものか、飴売に化けてこつちへ流れて来ましたが、偶然に藤六の店に目を付けてみますと、思いがけない藤六が住んでいる。しかもスツカリ耄もうろく碌ろくしている上に、相当の現金をシコ溜かめていることがわかりましたので、それこそ悪魔の本性を現わしましてコツソリ彼のか一軒屋に忍び込み、藤六の夜食の飯の中へ鼠ねずみとりぐすり取と薬くすりか何かを交せて、毒殺して後を乗取つた……」

「……エツ……そんなら親殺しじやな」

「ハイ。知らずに殺しました訳で……」

「それでも怪けしからん話じや。あの時に診察した医者いしやは誰じやつたな」

「ハイ。この間坑夫と喧嘩して殺されました新しんにゆう入いりの炭坑医で」

「ウハツ。あの若い医師か……」

「ハイ。狂染なしみの芸者が風邪を引いているのを過つて盛り殺した奴で……」

「……そうかそうか……あの医者にかかつちや堪まらん……フムフム。それからドウなつた」

「それと知りました藤六の乾児こぶんどもが、皆この直方に集まって来て評議をしました。それが、あの乞食の赤潮で……それから皆で手分けをして、本四国を巡礼しておりました藤六の娘のお花を探し出して、相手が実の兄である事を秘かくいて、仇討をさせようとした……それを銀次が感付いて、裏を搔いて逃げようとしたのが今度の騒動の原因であつたと雁八が申しますので……話の模様を考え合わせてみますと、どうやら雁八が黒幕らしい御座いますか……」

「ウムウム。ようよう経緯すしみちが、わかつたようじゃ。彼奴等あいつどもは復讐心が強いのでう」

「道德觀念が普通人と全く違いますようで……」

「……それもある……が……しかし……」

と云ううちに署長は何やら考え込んだ。いつもの癖で、椅子の中に深く身を沈めると、中ちゆうはげ禿はげの頭を撫で上げながら、自慢の長い鬚ひげを自烈度じれつたそうにヒネり上げヒネり下さげした。

「フム。それで……自殺の原因は……」

「ハイ。それがで御座います……ソノ……」

巡査部長は困惑したらしく額の汗を拭いた。

「……わかりませんので……その……僅かの際に致しました事で……全くその……私どもが狼狽致しましたので……縄を解けば白状すると申しましたので……その……」

「ウムウム。それは聞いちよる。……問題は自殺の原因じゃ。復讐を遂げると直ぐに自殺しよつた原因じゃ」

「……………」

「死に際に何も云わんじやつたか。巡査どもは何も聞かんと云いよつたが」

「私は聞きました。皆の衆。すみません……と……」

「皆の衆……その皆の衆というのは山窩の連中に云うた言じやろう……表の群集の中に怪しい者は居らんじやつたか。様子を見届けに来たような者は……」

「ハツ。それは居らなかつた筈……と雁八が申しました。お花という女は、まだ生娘では御座いましたが、ナカナカのシツカリ者で、わたし一人でキット親の仇を討つて見せるけに一人も加勢に来る事はならんと云うておりましたそうで……又、誰か仲間が見ており

ますれば、警察まで担かつがれて参りまする中に、途中でお花を助け出します筈……」

「ウムウム。それは理屈じやが……しかしお花は、丹波小僧が実の兄という事を、どうかして察しておりはせんじやったかな」

「イヤ。そんな模様には見受けませんでした。御承知の通りツイ夜明け方の一時間ばかりの間の出来事で御座いますけに……丹波小僧が何もかも先手を打って物を云う間もなく猿轡を噛まして、担いで来たと申しておりますが……实地検査の結果もその通りのよう……」

「フーム」と署長は考え込んだ。

「彼奴あやつどものする事は一から十までサツパリわからん。切支丹と似たり寄ったりじゃ」

「……………」

「ウム。まあ良ええ。それ位のところで調書を作ってくれい。自殺の原因は発狂とでもしておけ。警察の中で人を殺したのじやからナ……ハッハッ……」

それから署長は椅子の中で伸び伸びと大欠伸あくびをした。両手を高々と天井に突き伸ばして顔を真赤にした。

「アア……アア……ツと……厄介な奴どもじゃ——」

青空文庫情報

底本：「夢野久作全集」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年9月24日第1刷発行

初出：「オール読物」

1934（昭和9）年12月号

入力：柴田卓治

校正：土屋隆

2005年9月17日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

骸骨の黒穂

夢野久作

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>